

幼児教育と研究活動

清水 エミ子



現場の保育研究

研究活動といわれるものには、

- ① こどもの発達や指導の原理をつかもうとするための研究、
- ② 目の前にあることをどう導いたらよいか、ということのた
めの研究、

があると思います。つまり、純粹に学問的な真理を追求する研究と、教育の現場にあって眼の前のひとりひとりの幼児に最も適切な指導をしようとするためにおこなわれる研究活動があります。

私たちが目頃おこなっている保育活動を、科学的、合理的に展開しようとするところに、現場人としての保育研究があるのであって、これは私たち現場教師が誰でもタッチしなくてはならない問題であります。私たちがよりよい指導をしようとする中にも、

我々の研究者活動があることを忘れてはならないと思います。研究というと一般に日常の保育とは縁遠い高いもののように思われるのですが、必ずしもそうではないと思います。

問題は保育の現場から

研究を始めてゆく上にまず大切なことは「問題意識」だと思います。

教育の目的をつかみ、かくありたいと願いながらそれをうまく達成できないところに問題があると思います。そしてそんな問題は私たちの現場には多すぎる程あるのではないのでしょうか。

○各領域の中の問題、

○一日の流れの中の問題、

○設備、環境、その他の備え方の問題、

○子ども自体の問題、

○子どもの作る集団の問題、

など、いろいろあるでしょう。まず私たちがこうありたい、と思うのに対してうまく進行しない実態をつきつめ、客観的に把握する、そして解決の試案をたててみる、つまり、子どもに新らしい働きかけを試みたり施設および設備に対しては変化をあたえたりしてみるわけです。そこで、自分の投げかけた保育の働きかけで、子どもたちがどのように変化していくか、をつきとめていきつつ保育を展開していきます。この道の中に研究活動があるのではないでしょうか。

要は、今つき当っている問題（壁）を意識することから始まり、現状を客観的に把握しつつ保育を進めることにあると思いません。そこでここに、二、三の例をあげて私の心掛けている点を紹介してみましよう。

①集団に入らない子どもの問題

これはどこの園でもある問題です。

「おうい、光成ちゃん、ちよっとこいよ」

と茂君（ややボスのな幼児）が声を限りに光成君を呼んでいる、思いがけない光景です。呼ばれた光成君は九月末の現在も未だに友だちの遊びを傍観して楽しんでる存在なのです。

「早くかけてこいよ、早くこないと負けちゃうよ」。

私は室内で何がおこなわれているのか知らなかったのですが、「光成君、行ってごらんさい」と促し私も後についてゆきました。部屋の中では六名ずつのグループでまり投げ競争がおこなわれていました。ルールは二人で、まりを投げ合うのですが、落したらやり直すのです。

「ぼくたち負けてんの、よっちゃんの代りに入れよ」と茂君に手をひっぱられて、光成君は無言で列の一番前に立ちました。

ヨードン、で相手の投げた高目のまりを無表情で跳び上りながら取りました。瞬間、並んでいた子どもたちが「ワァー」と歓声をあげました。

「いいぞいいだ光成君」とみていた誰かがはやしました。光成君はうれしそうに笑って列の後にまわりました。茂君のグループが勝ったのです。二回目を始めようとした時、集合の合図が流れてきたので、ゲームは中止され、みんな手を洗いにゆきました。水道の前でできた列から「光成君まり取るのうまいのなあ ぼく知らなかった。いつもぼくらの組にしような」と聞こえてきました。

今まで、いろいろの手だてをこうじて、消極的な光成君は集団に入れなかったのに、たった一言の友だちの呼びかけで、何の苦もなく集団に入ってしまったのです。

◎なぜ光成君はスムーズに集団に入ってゆけたのでしょうか。

◎なぜ茂君が光成君を呼び入れたのでしょうか。

これは放っておいてそうなのではなく、やはり研究活動の展開によってなされたのではないかと思われまます。

私は入園してくる幼児を、

①自分の力で集団にはいれるように、

②集団にはいれてもお互の立場を認め合えない反社会的な幼児(集団をこわす)に対しては、この状態を無理なく脱脚させてゆかなくてはと、意識的に取りくむことに努力してきました。

光成君の場合、

性格が内向的なうえ、入園まで(5才)外遊びをさせられなかった(病弱で)ため社会性がなく、友だちがほしくても見るもの聞くものに抵抗を感じ集団に入ってゆけなかったのです。

そこで私は、光成君が気楽に集団に入れるよう、入園以来六か月間、積木遊びのような抵抗を感じない遊びに近づけるようにしたり、座席なども同じ性格の幼児となるべく近づけ親密感を持たせたり、園庭ではみんなの遊びがよく見える所でいろいろの遊びをみせるようにし、ぜったい無理をせず徐々に集団の楽しさに親しませていき、孤立している状態をだんだんときほぐしていったのです。そのうち、おっかなびっくり自分で動きだそうとしたり、みんなの遊びを見ていておもしろいと声を出して笑ったりな

どの反応を示すことが多くなったので、私はその反応状態を記録し、変化を考察して次の指導にもっていったのです。そんなことをくり返している時、このまり投げ競争が、

・その場の雰囲気(学級全体)が一つにとけ合って抵抗を感じなかった。

・グループのひとりひとりがお互の立場を認め合える雰囲気(ボスの存在を許さず協力的)だった。ので今日の結果がでたのだと思われまます。(スムーズに集団に入っていた)

またこの研究で見のがせないのは、研究の対象以外のこと、たとえば、劣等感が原因でボスになっていることも、学級集団が自然にその劣等感を認めた時、劣等感が解消し素直に自分を出し、また他人も認められるようになり、ボスでなくなる。そして、学級全体が、自主的に活動できるようになることを知らされたのです。

②主題に適応しないこどもの問題

自由遊びの時は、多くの友だちと楽しく遊べる豊君は、一つの目的をもって活動をする時(教師の意図的活動)必らずと言ってもよいほど皆とちがうことをはじめめるのです。たとえばリズム遊びの時などは部屋の隅で絵をかいたり、絵画の時は、紙を切るなど、不必要に主題と全くちがう物を作ってしまったります。そのうえ、部屋に入ると一言も口をきかなくなってしまうのです。

(自由遊びの時話していた友たちとも)

(4) そこで私は、豊君の実態を把握することを始めました。まず行動記録です。

四月から六月までの行動記録からはこれという原因はつかめず、解決策が求められませんでした。しかし、遊びながら発していることばに、時々ハッとさせられることばのあるのを発見し、それから彼の行動記録とことばの記録を合わせておこなうようにしました。(いつでも記録できるようにポケットに記録用紙を用意しておく)

すると友だちに「君んち、兄ちゃんいる、兄ちゃんてどうしているのかなあ、ぼく兄ちゃんのいない所に行きたいなあ」

「ぼくんちのお母ちゃんと、君んちのお母ちゃん取りかえっこしないか」

「ぼく手品で兄ちゃんを何か作れなくしたりお母ちゃんが何か言えないようにしたいなあ」

というようなことを言います。私は彼の問題が、こちらへんにあることを見通し、彼の話し相手になるようにつとめ、まちがいない彼の心をつかむようにしました。

(5) また別の角度から、母親に連絡し家庭の状態をいっしょに考えてみました。それによると、

・ 母親が彼の行動についていちいち兄と比較するので劣等感を

いだいているらしいことがわかった。(こどもを良くしようと
する熱意のいきすぎから)

・ 祖母のしつけがやかましかったため、何をするにも、おとなを意識してしまうことがわかった。

そこで母親に、兄と比較すること、祖母が口やかましいのが原因であることを知らせ、兄との比較をやめ、かんしようにさげ、小さなことも認めてあげ自信を持たせるように、と注意した。その結果、

◎今までよりずっと適応性ができて友だちともだいぶ同調できるところになってきたが、まだまだ目的と違うことを勝手にひとりでやることもある。(話し合いをしても皆とちがうことを平気で話します)

(4) 記録を続けてゆくと共に他のこどもともにおこなった向性検査や知能検査の結果も参考にしていった。向性は正常。WISCのIQは動作性一二〇、言語性八五ということもわかった。そこで、

(5) もう一度彼の行動をフリダシにもどし、克明にみつめてみた。

◎座つてする手先の仕事(絵画製作、話し合い)をする時にくくに適応しにくく、体全体を動かしてする(リズム遊びや、ごっこあそび)時はスムーズに適応していくことがわかってきた。

(例) そこで私は体を動かしながら、描いたり作ったりできるような場を多く作ってあげるようにつとめた。

◎当番の他に数種の係のしるしを用意しておき、いろいろの友だちとやれるように仕向けてみた。

皆集団に入れるようになった11月のある日



活発に係の責任を果たせるのです。ここまでできた時は、

(例) それぞれの活動のリーダー格の子にリードしてもらい、私
が表面にでず、いろいろの活動に導入していった。たとえば、私
共同絵をかく時などリーダーに「豊君、ぼくらの組にこいよ、
きみここへ汽車描きな」とグループに入れてもらうようにし、母
親には豊君の進歩を話し家中でみとめてあげるようになったのだ。

◎十月中頃から毎日うすがみをほぐように活発に、そしてスムースに適應する(自分の活動を自信を持つてする)ようにまですたのです。

現場の保育研究の要点として

以上述べたような活動を通して私は、

- ・問題意識を持ち、小さい問題を持ち、小さい問題をもみ落とさず意識的に処理し意図的に仕向ける。
- ・幼児の実態を正しくみつめる。
- ・少しの変化も見逃さず正しく記録する。
- ・欲張らず計画を立て小口に問題と取り組む。

こうした研究的な保育活動が積み重ねられることによって幼児を変えてゆくように思っています。

また、忘れてならないことは、結果の蓄積だけで終らず、客観的に見直しこれを比較研究してゆけば客観的信頼度も増していくのではないのでしょうか(信頼のおける法則が見つけ出されるのではないのでしょうか)。

私はこのような研究活動を進めてみて、現場の問題は手ばなしでは誰も解決してくれない、いろいろの研究の結果を参考にしながら、自分がその問題解決(研究活動)をしなくては何一つ問題の解消はない、と痛感している次第です。
(東京・関屋幼稚園)